

涅槃図の前に誰より長く居て

有岡萃生

春の川ぬるりと泳ぐヌートリア

齋藤亜矢

雪道へ狐ゆつくり消えゆけり

福のり子

枿酒の枿に鬼の絵節分会

大石高典

下萌や庭師の蹠湿りがち

朝田玲子

風はみな岬を離れ春の暮

鈴木大輔

節分祭いつもの場所に漬物屋

栗本徳子

母樹として育む梅の真白なり

高松房子

土匂ふ工事現場の重機音

小寫和

とんとんと柵の上ゆく寒鴉

加藤剛

貫入のかそけき音や春の雪

谷口文子

書庫の灯の歩めばともり春寒し

福江ちえり

飄々とひとひらの雲うららけし

津嘉山典

冴返る大樹の陰の地藏堂

片山旭星

漆黒の丹沢山系冬夕焼

植田清子

原爆ドームの傍へ煌めき春の雪

田中勝

寒明や百人抜きし上り坂

佐藤慎一

浦ごとに訛ある島ようず吹く

片岡和子

梅が香をたどり湖畔を一周す

小堀尚美

氷室集

春昼や行司のをらぬ紙相撲

有岡萃生

火の山の黒き裾野の侘助よ

福のり子

得意げに幼ナ掲ぐる雪つぶて

宮坂千種

そちこちに野焼の烟る日曜日

矢野裕俊

初午や背ナに架けたる狐面

瀬崎るみ子

陽炎と登る坂なり活断層

大石高典

亀鳴くや法然院の裏の路

寺川貴也

気嵐や見え隠れする大漁旗

宮坂千種

島々の黒糖の香や雲雀東風

昌山瑠美子

橋脚に当たれば速し春の水

鈴木大輔

騎馬隊の馬に山の名木々芽吹く

中川さち

熊の駆除宇宙の暗く膨張す

加藤広文

月冴ゆやおのが影踏み興福寺

田中白秋

山城の土塁は途切れ雑木の芽

高松房子

春禽の羽ばたきひとつ風ひとつ

朝田玲子

能登よりの酒よ肴よ二月尽

小嶋和

底冷や役者泣かせの橋掛り

細見昌代

春めくや完走讃へ大鳥居

佐藤慎一

紅梅や空の青さを引き寄せて

米倉大司

押出しの投手は吾子や春なかば

桑原智美

氷華集

2026年4月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

ひたひたと池の端より凍りけり

福のり子

信楽の狸横目に狸過ぐ

齋藤亜矢

竈無き世に白朮火をなほ受けて

谷口文子

川舟に入り乱れつつ冬鷗

朝田玲子

着ぶくれし男二人の法善寺

有岡萃生

鹹豆漿口に含みて年惜しむ

大石高典

寒灯下一匙残す椀の粥

鈴木大輔

初買に使ふや新しき硬貨

加藤剛

黎明の首里城に初明りなる

津嘉山典

失物の巫女より届く残り福

小寫和

月冴えて八坂神社の檜皮葺

田中白秋

天辺の達磨火を噴く大どんど

柳堀悦子

鼻の眠りを思ふ風の夜々

片岡和子

新しき盃ひとつ今朝の春

片山旭星

鴨鍋のスープの滋味の深きこと

栗本徳子

初風や遠州横須賀べつかこう

丹羽康夫

百歳に羽根より軽きコート選る

伊東弥生

面取れば少女の顔に寒稽古

小堀尚美

覚えなき鳥の声きく今朝の春

中島冬子

氷室集

比良山を軽々と越え雪来たる

石上敦子

屠蘇酌むや幼十揃うてへの字口

宮坂美緒

木に戻れさうに見えざる木に冬芽

有岡萃生

暗闇にしづる雪音聞きてをり

福のり子

陰暦の暦求めて年の暮

寺川貴也

祖母の味は南蛮渡来阿茶羅漬

朝田玲子

酒醸す酵母の黙や冬の雷

加藤広文

路地奥の小さき店のきりたんぽ

大石高典

海吹ゆる能登の仮屋は冬支度

瀬崎るみ子

煤払ひ星がきれいに見ゆるなり

鈴木大輔

数へ日や置物のごと奈良の鹿

小寫 和

納豆掻き混ざる間の無言かな

加藤 剛

馬の字の駆け出す如し筆初

昌山瑠美子

手袋の乾かぬままに登校す

二宮悠太

冬空やに西へと急ぐ雲一つ

片山旭星

雪深し過去の記憶の上にまた

川竹美樹

浄瑠璃の糸寒気打つ響きかな

片岡和子

七草そろはで唱ふのみ七日粥
雪晴の鶏小屋狙ふ鮠かな
解錠の音確かなる淑気かな

山田ミチ子
柳堀悦子
伊東弥生

氷華集

2026年3月の雑詠から尾池和夫抄出

装蹄を終へし蹄の音の冴ゆ
味噌汁に渦忽然と寅彦忌
母逝きぬ冬満月のその下に
二筋の火の粉引きゆくおん祭
歳晩や栗ぜんざいに箸深く
冬茜指の先より暮れゆけり
ふと我に返りたるとき隙間風
禅堂に響く警策成道会
六花散る夜にゐて母の独り言
底冷の底はまだ先京の町
身代りの南無観世音夕時雨
群青の海や無音の山眠る
踏みしめて雨の香となる落葉かな

氷壺集

朝田玲子
齋藤亜矢
加藤 剛
栗本徳子
有岡萃生
福のり子
谷口文子
小堀恭子
森 壹風
中島冬子
田中白秋
津嘉山典
鈴木大輔

山凍つやどんと日暮るる秩父祭

柳堀悦子

小食の麒麟群れ立つ冬の朝

大石高典

万年筆にインク吸はすも年つまる

福江ちえり

白壁の蔵窓高し霜雫

高松房子

冬夕焼追ふカヤツクの舳先かな

伊東弥生

冬晴や雲はしやぐごと流れ行く

山田ミチ子

氷室集

被爆者手帳形見となりし冬の朝

石上敦子

発酵の加減ほどよきすぐきかな

昌山瑠美子

山茶花や子のもの一切捨て難し

有岡萃生

狐火に浮かぶ童の貌ぬらり

福のり子

冬北斗教はる甥つこは園児

宮坂美緒

冬の月とんとんとん紙相撲

鈴木大輔

もつちりと昆布締甘し若狭ぐじ

鳥居裕子

置き去りの虫かごへ吹く軒の風

加藤広文

冷たしや鍛冶屋の造る猪留刀

柳堀悦子

注連縄を編むこと習ひ年用意

矢野裕俊

裏路地の居酒屋の消え鯨鍋

大石高典

ぐいぐいと仔犬引きゆく冬銀河

朝田玲子

奈良の闇ますます深し初時雨

田中白秋

クリスマス子らは喧嘩を棚上げに

小堀尚美

時雨去り虹残りたる京の空
通し襖開け放ちたり武家屋敷
木守柿空の深さを計りたる
一元の焼諸ドラム缶窯に
病みし身をもて余す夜や根深汁
掛軸に無事の二文字十二月

片山旭星
高松房子
清水淑江
寺川貴也
瀬崎るみ子
秋山陽子

氷華集

2026年2月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

韓紙貼の韓屋の窓に秋日さす
一軒のための道あり山眠る
柗の花や記憶のなかの母
是もしや馬達加斯加の海鼠かも
「忘れ傘」借りてもみたし初時雨
くねくねと入り組む径を茸山
山眠るとんからとんと子守唄
四ツ目垣の棕櫚縄しかと実万両
倒木の倒れきれざる冬日かな
冬うらら江の島見えてまた隠れ

小寫 和
有岡萃生
齋藤亜矢
大石高典
谷口文子
加藤 剛
福のり子
朝田玲子
鈴木大輔
牧田満知子

紅茶葉のほどけるはやさ冬落暉

津嘉山典

引潮や足跡一人秋の暮

田中白秋

十一月空気のかたき朝となり

小堀恭子

作業場の牡蠣剥く音よ礬の香よ

碓氷芳雄

母と子に同じ恩師や福寿草

伊東弥生

石路の花明るき故に寂しくも

栗本徳子

冬ざるや縮みし背丈一糶

中嶋冬子

立冬やスープに木匙添ふるころ

高松房子

図書館へ紅葉の風に押されゆく

福江ちえり

氷室集

海よりの生命だいに鳥賊を干す

昌山瑠美子

地を打つて飛び立つ鳥や朝の月

加藤 剛

手拭と身幅前垂れすぎき売

鳥居裕子

木の実降る無名信徒の処刑塚

加藤広文

冬の池かつてイサンお釣場とふ

小 崙 和

寒晴や跳ね確かなる母の筆

有岡萃生

浪の花流木白き骨となり

瀬崎るみ子

ロッキ―山脈大雪嶺へ朝日影

朝田玲子

母鹿と目線の合ふや目を伏せて

福のり子

沢庵を噛む音に知る夫の無事

谷口文子

遠富士の白きを望む小春かな
炉煙に笑ひとけゆく如くなり
幼さの残るてのひら栗を載せ
東大の銀杏落葉の厚さ踏む
冬ざれや陸に朽ちゆく大錨
初雪の音なき白を踏みしめて
熊のため伐採されし木の受難
異人館坂を喘ひで秋の宵
紅葉散る流紋しるき白砂壇
浜風やばけつの中に牡蠣あふれ

鈴木大輔

宮坂美緒

寺川貴也

大石高典

片岡和子

米倉大司

中島冬子

大村 誠

片山旭星

田中 勝

氷華集

2026年1月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

縄文の話つまみに零余子食む
長き夜や馬の敷藁厚うして
くり抜かれ南瓜は笑ふばかりなり
秋風のなかの日月に磨崖仏
天高し竜のかたちの雲流れ
秋惜しむすり傷目立つ腕時計
栗飯と聞けば実家に行くならひ

齋藤亜矢

朝田玲子

谷口文子

福のり子

加藤 剛

小堀尚美

有岡萃生

月満ちてやをら能面外しけり	清水淑江
目を子らに会はせ膝折る赤い羽根	碓氷芳雄
日だまりを猫が占めゐる文化の日	片岡和子
大鳥毛ゆふらり回る芋嵐	大石高典
御苑とて木の実にみとれ木の実踏む	城戸崎雅崇
白檀の香の煙や秋の夜半	片山旭星
降る雨の音無く稲架を濡らしけり	鈴木大輔
秋の雪富士堂々と師のごとし	田中 勝
焼栗は五個一ユーロ巴里の宿	牧田満知子
身に入むや雲一筋の薄れゆく	津嘉山典
露地抜けてまた露地巡る雪ばんば	伊東弥生
君在らば温め酒よ今頃は	前田鈴子
	氷室集
星座図になき星を知り穴惑	福田将矢
鈴なりの柿雨粒を集めけり	昌山瑠美子
貼り終へし障子に影の新たなり	寺川貴也
秋声やきりりと結ぶ面の紐	鈴木大輔
菩提子や寺の甕の反りゆるき	朝田玲子
夜の底へ落つる音する桐一葉	瀬崎るみ子
釣竿にずしりと重きたちの魚	大石高典
鱗雲を見下ろす街や摩天楼	福のり子

維盛の墓や棚田を落し水

石上敦子

秋あかね散歩いつしか速歩に

宮坂美緒

二十億光年の詩や星流る

加藤 剛

秋寒やバーの扉を背ナに押し

有岡萃生

老眼鏡はづして独り虫時雨

加藤広文

遠鳴きの鹿の声あり里の山

米倉大司

朝霧やリュックの重き洗越し

牧田満知子

周山に空の広がる刈田道

片山旭星

綿虫に綿の重たき朝かな

伊東弥生

膨らみし稔田ぐんと刈り進み

高松房子

古宿や湯船の外のいなびかり

田中白秋

女郎花もの言ひたげに御所の隅

谷口文子²